

特別審査委員賞 [留学生の部]

言葉に対する鋭い観察力と、異文化理解への真摯な姿勢が審査委員の心に響きました。論文としての構成力や繊細な文章も高く評価されました。

NPI学生小論文コンテスト2013
世界に向けて未来を提案しよう!
あなたが考える“わくわく社会”を
描いてください
入賞作品



異文化理解による 正しいコミュニケーション

麗澤大学 外国語学部3年

朴 管成 ぱく かんそん (韓国)

はじめに

来日後、年配の日本人が重い荷物を持って階段をおりるのを見て「手伝ってあげましょうか」と言ってしまったことがある。当時私は、まだ日本語になれず、日本語で話すときは韓国語の直訳に近い日本語を使った。韓国では「手伝ってあげましょうか」と言っても全く問題ないため、普通に日本語に直訳して話したが、年配の日本人が突然不機嫌な顔をして驚いた記憶がある。後に、「あげる」という授受表現は、場合によって相手を見下ろす感じにもなるため、気をつけなければならないということがわかった。この場合、正しくは「私

がお運びしましょうか」がよいだろう。これは、私が「あげる」の意味を間違えて理解したというよりは、「あげる」に込められているニュアンスがわからなかったから生じたコミュニケーションエラーだと言える。このように言葉は国によってニュアンスが違い、このニュアンスの違いは一つの約束された文化として定着している。このような違いを乗り越えない限り、正しくコミュニケーションすることは難しくなり、お互いに協力し合ってより発展的な未来を作り上げることはできない。このような違いを理解するために、私たちは何をすればよいか。本稿では、未来の発展性と可能性を目指しながら、正しいコミュニケーションを

するための具体的な方法について述べたい。

言語活動で表れる文化

言語活動と文化はどのような関係があるのか。来日後、少しずつ日本語が話せるようになってからは、日本人と話すことを楽しく感じた。しかし、私が年齢を聞くと日本人は急に困った顔をする。後に、日本人に、特に女性に年齢を聞くことは失礼だということがわかった。私から年齢を聞かれた人はきっと私のことを無礼な人だと思っただろう。しかし、これは日本と韓国との敬語システムが違うからである。一言で言えば、日本は相対敬語、韓国は絶対敬語の敬語システムを持っている。例えば、父の弟から電話で自分の父へ電話をまわしてほしいと言われたら、日本では「父は～」で始まる。しかし、韓国では「お父様は～」で始まる。なぜこのような違いが生じるのか。日本では基本的に話題の人物ではなく、電話する相手が尊敬対象になっている。従って、いくら父より下の人であっても、電話する相手(父の弟)を尊敬して父には敬語を使わない。しかし、韓国では電話する相手が話題の人と比べて下の人であれば、たとえ電話の相手が自分より上の人だとしても話題の人を尊敬する。つまり、韓国ではこの場合、おじさんが自分より上の人ではあるが、父からすると下の人であるため、父を基準にし、父

にしか尊敬語は使わない。従って「お父様」になる。韓国では、敬語を正しく使うためには、自分を含め、お互いの上下関係がわからなければならないということである。この敬語システムは一つの文化として定着し、文化は言葉を通して表れる。それでは、この言葉を通してその国の文化がすべて理解できると言えるだろうか。

2012年の国際交流基金の調査によると、2011年現在、世界における日本語学習者数は中国が第1位で、韓国は84万187人に達し、第3位である。特に韓国は人口1万人当たりの日本語学習者数を算出すると174.4人であり、世界第1位である。数字だけ考えると、中国の約24倍である。つまり、韓国の国民の100人の内1～2人が日本語ができるという意味である。しかし、このような人たちが日本の文化をすべて理解しているとはいにくい。なぜなら、言葉の意味を理解することは、その言葉の背景知識が求められるからである。例えば、天皇という単語を例としてあげると、韓国人が考える天皇と、日本人が考える天皇の意味にズレがある。このズレは戦後に生じ、今に至っている。この意味的ズレを抱えたままでは、コミュニケーションに摩擦が起きることは当然かもしれない。これらのズレを解決するためには、やはり歴史と文化の説明が不可欠であり、言語を学ぶだけで自然にその文化がわかるのではないということである。それでは、相手の文化を理解

しながら正しくコミュニケーションをするためには何をすればよいか。結論から言うと、まず相手の話を「聴く」ことが大切ではないかと思う。

日本における「聴く」 問題点と解決案

日本に留学してから今まで私が一番気をつけていることは、「聴く」ことである。これは私が日本への留学を決めた目的でもある。自分の意志表現をすることは初級の学習者でもできる。しかし、聴くことは訓練が必要である。相手が言いたいことと求めていることを注意深く聴いて理解することは大変難しい。結局、文化が言語活動によって表れることを考えると、相手からの発信を注意深く聴くことは、その国の文化を理解する近道だと思う。このように相手からの発信を注意深く聴くためには、やはり、その国の人と直接会うことがよいだろう。しかし、現在の日本の事情は逆向きになっている。文部科学省の発表によると、日本人の海外留学状況は2013年2月8日現在5万8,060人であり、2004年度と比べ2万4,885人減少している。これは積極的に外国人と向き合う日本人が減少したとも考えられる。今のところ海外に留学するメリットを感じないという答えが複数出た、2013年3月に行ったNHKの調査結果がその根拠で

ある。それでは、外国人と向き合える方法はほかにないだろうか。

2013年3月に外務省が発表した日本に在留する外国人数は、2012年現在203万8,159人である。前年度と比べると0.4%減っているが、決して少なくない人数である。つまり、日本に在留している外国人に積極的に向き合えば、国内留学もできるということである。実際に、韓国のコミュニティや私が在学している大学では、日本人との交流会や勉強会が盛んになっている。これらの交流会や勉強会を通して外国人と積極的に向き合い、彼らの文化を学ぶことはどうだろう。もちろん、海外に直接行って外国人と向き合う人と比べると、やはり違いはあると思う。しかし、現在日本に在留している外国人は、大震災の不安に負けないほど日本に深い関心を持っている人であり、日本人と積極的に向き合うために来た人だとも言える。このような観点から考えると、日本に在留している外国人と交流することは、よりやさしく外国の文化に接することができるよい財産ではないか。

自文化の理解から 理解させることへ

次に、相手を理解したならば、自分の国の文化を相手に理解させることも必要である。自分が相手の文化を理解するだけでは、正し

くコミュニケーションすることはできない。結局、正しくコミュニケーションをするためには一方的な理解ではなく、互いに理解する必要があるからである。相手に理解させる能力は、単なる「話す」能力とは違う。自分の意志表現を「話す能力」と言うならば、相手に理解させる能力は、まず自分の国の文化を理解した上で可能になる。単なる意志表現では、異文化の人は理解できない。それでは、自分の国の文化を理解することは具体的に何があるのか。

初級の日本語学習者が多く間違える部分は、自動詞と他動詞の使い方である。日本語の自動詞と他動詞は一見文法的に分けられたようにも見えるが、実は日本の文化も込められている。日本では、お茶を持ってくるときに「お茶が入りましたよ!」と言う。日本人には不思議ではないこの表現が、外国人にとってはおかしく感じる。なぜなら、この表現は、まるでお茶が自ら意志を持ったように感じるからである。つまり、お茶を主語にし、動詞は自動詞にしたため、お茶に意思性が与えられる。当然お茶には意思性がないため、外国人がこの表現を初めて習うときは理解できない。他にもレストランで、何を食べるかまだ迷っているとき、店員から「ご注文はいかがですか」と聞かれると、「まだ決まっています」と言う。この表現も日本人にとっては自然な表現ではあるが、外国人にとっては理解できない表現である。なぜなら、注

文するのは「私」であって、「注文」そのものには意思性がないからである。つまり、「まだ決まっています」と言うのと、「注文」が主語になり、注文をする「私」は薄れてしまう。もちろん「まだ決めてないです」と言う人もいるだろう。しかし、これに比べて「まだ決まっています」の方が印象がいい。

上記の例のように、日本人は、話題の対象を主語にし、自分を薄める傾向がある。つまり、直接的な言い方をさけることで相手への配慮を示す。「(私が)ドアを閉めます」ではなく、「ドアが閉まります」のように、相手と自分との間にワンクッション置くことで、表現を和らげる。これは自然に言葉に込められている日本の文化の表現である。このような日本語のシステムとその理由がわからないまま「私」を主語にした表現のみを使うと、通じのかもしれないが印象が悪くなる場合もあるだろう。このことは正しいコミュニケーションとは言えない。しかし、このような言葉に込められている文化に気がつく人は少ない。やはり自分の文化を理解させるためには、まず自分の国の文化の特徴を理解し、それから伝えることが必要ではないだろうか。以上が正しいコミュニケーションの基本前提だと思う。

異文化間の正しい コミュニケーション

社会においてコミュニケーションは不可欠なものであり、ほとんどの社会がコミュニケーションによって動き、成立していると言っても言い過ぎではないだろう。人間が集まって共同生活を営む集団のことを社会と言うならば、コミュニケーションは、共同生活に必要な約束だと言える。このようなコミュニケーションは社会によって違い、お互いに違う社会はお互いに違う文化を生み出す。上記の例ではわかりやすくするために外国と自国との比較をしたが、異文化という言葉は外国に限って使う言葉ではない。年代差、性差、地域差、障害の有無、社会的格差などによる異文化もある。正しいコミュニケーションは、自分にはないが相手にはあるものと、相手にはないが自分にはあるものを見つけ、このような違いを乗り越え、最終的に共に助け合うことができる。相手の話を聴き、自分の価値観と見方を共有することで、異文化を理解する。従って、社会で生きている限りは、やはり互いに理解して助け合う必要があり、そのような意味として正しいコミュニケーションは不可欠なものである。

終わりに

よく言語は、その国の文化が込められていると言われる。日本語を専攻にしている私は、日本語を学ばば学ぶほど、日本の文化や価値観、考え方を学んでいることを感じる。また、文化が違うという事実を知っていることと、理解して認め、受け入れることは大きな違いがあることに気がついた。自分との違いを発見し、相手の優れているものを積極的に見つけて取り入れる。それと同時に、自分にしかないものは何かを見つけ、みんなと分かち合う。先祖たちが互いに協力して今の世代を残したように、我々もお互いに理解し協力することで、より発展した世界と未来を私たちの子供たちに見せるべきではないだろうか。これらのすべてはコミュニケーションが正しく成立してから可能であり、より発展した未来を次世代に見せる第一歩でもある。そのため我々が今できることは、まず我々が積極的に異文化と正しくコミュニケーションをとって、未来に対する希望と夢を見ることである。未来に対する希望と夢を持つ人が、わくわくする社会を造ることができると思う。正しいコミュニケーションを通して、次世代に未来の発展性と可能性を提示することは、現在を生きている我々の課題であり、使命ではないだろうか。

参考文献

- ・ 唐須教光 編『開放言語学への招待——文化・認知・コミュニケーション』慶應義塾大学出版会、2008年
- ・ 木村健治・金崎春幸 編『言語文化学への招待』大阪大学出版会、2008年
- ・ 西村淳子 監修・武蔵大学人文学部 編『多言語・多文化学習のすすめ——世界と直接対話するために』朝日出版社、2008年

引用文献

- ・ 国際交流基金「2012年度 日本語教育機関調査」
<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/result/survey12.html>
- ・ 法務省「平成24年末現在における在留外国人数について（速報値）」
http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00030.html
- ・ 文部科学省「日本人の海外留学者数」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/02/1330698.htm

※ウェブサイトは2013年8月20日最終閲覧